

---

# とある科学の氷結使い（フリーズバンド）

ジュンボ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の氷結使い（フリーズバンド）

### 【Nコード】

N8687Z

### 【作者名】

ジュンボ

### 【あらすじ】

人口230万人の学園都市に住むとある少年の成長の物語です。

今回初めて小説を書きますので非常に読みづらいです。  
ですが一生懸命書きますのでよろしくお願いします。

## 第1章（前書き）

### 第1話

## 第1章

（人は、結局独りなんだ。どんなに友情や絆なんて表現があっても  
ささいな誤解から人は裏切り、裏切られる。それが世間であつ  
ても同じことだ。      だから俺は……………）

）

目覚ましのアラームがワンルームの部屋に鳴り響く。

「……………つくそ！」

目覚まし時計を止める。月曜日の7時だった      カーテンから差し  
込む光が部屋の一部を明るく照らす。

「学校か、正直面倒だな。」

ここは、人口230万人の学園都市。そのほとんどは学生を占めている。そしてこの町は超能力の開発が行われている。学生のほとんどは超能力を使うことができる。そしてこの男、宮離 春樹（みやり はるき）もまた超能力を開発されている。

「それにしてもいつになったら夏休みなるんだよ！」

寮を出て、少し曲がりコンクリートの非常階段をゆっくり降りながら駐輪場へと向かう。

駐輪場に止まっているのは自転車ではなく原付バイクである。この学園都市に住んでいるだいたいの学生は寮に住んでいる。年齢や校則に問題がない場合、免許をとっても問題がない。

朝の通学はバスや電車などを利用する学生が多い、しかしバイクの方が時間を気にしなくていいと言う長所がある。  
宮離はバイクに乗り込み、学校へと向かう。

学校

「おはよー」

「今日システムスキャンうちの学校だよー」

「この前よりレベル上がってるかな」

朝の教室はある話で盛り上っていた。

システムスキャン 能力の定期的な測定である。測定の評価はレベル0～5までの6段階評価される。

ガラリとドアを開けると宮離は教室に入る。しかし、クラスからの反応は冷たい。それは単にいじられているからではなく、宮離が入学してから一学期の終わりが近いこの日までクラスに積極的に関わっていないからである。

成績もどちらかと言うと、いや、どちらかと考えるまでもなく下の方で追試も確定的である。本人もそれはよく解っている。だがクラスメイトはそんな彼をきにかけない。よく解っている。

しかし今日はなぜか、本人にも解らない事が起きたのだ。クラスの輪の中から一人が宮離の席に向かって来る。

「よう、宮離！今日はシステムスキャンだなお前の能力ってなんなの？レベルは？便利なやつか？珍しいのか？楽しいのか？」

いきなり質問され、ずいぶん内容が多くて返答に戸惑いつつ

「便利かどうかは知らないが珍しくて楽しいのはお前だ。」

宮離は質問に答えつつ、冷たい態度をとる。

「いやいやそんなユーモアな回答を求めているわけじゃないんだ」

ユーモアに聞こえたようだ。

「ただお前の能力について少し気になってさ、それで聞いてみた

んだ、でどんな能力なんだ？」

再び質問する。

それと同時にホーームルームのチャイムがなる。黒板には、あらかじめ決められている測定場に行くように指示されていた。先生は測定の準備で忙しいようだ。

「何でもいいだろ！」

ガラツと椅子から勢いよく立ち上がる宮離。

「待ってくれ宮離！」

「……なんだよ。」

「オレ、不知火！      不知火      暁（しらぬい      あきら）」

「だからなんだよ……」

「オレ今日、校庭で測定があるんだ！      面白くないかもしれない

けど良かったら見に来てくれ」

「……………文化祭の出し物か！」

「ナイスツツコミ！」

ぐつと右手の拳を縦に向け親指を立てる不知火。それに対して測定場所へ向かう宮離。しかし、宮離はあらためてプリントを見直す。あらかじめプリントで決められている宮離の測定場所は……………校庭。

「……………ッ」

舌打ちした宮離は眉間のシワを波のようによせていた。



発火能力（パイロキネシス）（前書き）

第2話

## 発火能力（パイロキネシス）

校庭ではすでに別のクラスが能力測定を行っている。学園都市の超能力はあまりにも種類やレベルが多い。そのため、測定方法も多い宮離は体操服に着替えて校庭と校舎の通り道にある階段に独り座っていた。すると、校庭から巨大な火の玉が出現した。あらかじめ校庭の200Mトラックの外側には消火ロボットと他の生徒が口を開けながら見ていた。

内側には生徒が一人立っていた。

不知火である。

『測定終了。不知火暁レベル4』

アナウンスが校庭に流れると外側にいた消火ロボットが内側に入り炎を消していく。あとに残った黒煙が、熱を放ちながら校舎に向かう。しかし他の生徒は全く気にしていない、それどころか内側にいる不知火のところへ走っていた。宮離だけは座っていた。特に行く理由がないのだ。むしろ、見たくもなかったのだ。

「スゲー不知火。」

「さすがうちの学校のエース」

不知火の周りは不知火を賞賛する声で賑わっていた。

「ありがと。」

それに答える不知火。

これが不知火暁と言う人間なのだ。能力が高く、みんなから慕われ、

明るく、容姿も悪くない、誰しも一度は夢みる人格だろう。  
才能、人気、容姿、すべてを備える不知火は、まさに少年漫画の主  
人公のようだった。

「おい、宮離〜！」

そんな不知火とはほとんど別世界の住人、宮離は近づいて来る不知  
火を警戒した。

「どうだった？」

「典型的な発火能力者だな」  
バイロキネシスト

不知火の質問に対して宮離は冷静に答える。

「いや、宮離の能力測定の事だよ」

「まだこれからだ。」

「何の能力だ？」

「そのうち解るだろ。」

「ここで測定つてことは、精神系じゃあないよな」

「まあな」

「よっしゃ〜！」

不知火が大きな声で叫ぶ。

「……なんだよ」

「今、宮離と初めて会話が成立した〜！」

「……だからなんだよ。」

宮離は鬱陶しそうに不知火を見る。

「いや、素直に嬉しくて！。それに、一度でいいから宮離と話してみたかったんだよ。もうすぐ夏休みじゃん、だから少しでも宮離をクラスに溶け込めるようにしようと思ってさ。ほら2学期からは大覇星祭とか学校対抗の行事があるだろ。少しでもみんなの能力を活かそうってクラス委員長の宝条さんと昨日話してさ。俺たちの能力でババーンと」  
「一つ言っておくぞ。」

不知火の話を裂くように宮離は言葉を出す。更に宮離は鋭い目付きで不知火を見る。

「な、なんだよ。」

「……俺たちみたいな他人と比べてレベルの高い能力をもつやつは、それをコントロールする必要があることを、常に意識しなくてはならないんだ。でないと、周囲の人間を傷つける結果を招く。それだけは覚えておけ！」

不知火はきよんとする。

「それは、そうだな。うん覚えておくよ。宮離の言うとおりだ。」

不知火は宮離の忠告に対して曖昧に答える。

『次、宮離！ 測定位置に付け。』

アナウンスが校庭に流れると、宮離は座っていた階段からスッと立ち上がり200Mトラックの内側に立つ。不知火は宮離の言った言

葉を、もう一度よく思い出す。

「……高い能力。……俺たちみたいなの？」

不知火がそんなことを考えるとトラックの内側で、宮離は地面に手をつける。次の瞬間、校庭はスケート場のように均等に氷が張られていく。

『測定終了！ 宮離春樹レベル4！』

不知火は先生のいる白いやねのテントに走り込んだ。

「坂月先生！」

「なんだ、不知火。」

「い、今！ 宮離の名前が、それにレベル4って」

「ああ、宮離は学園都市でも珍しい原子発生型で名前は……」

坂月先生はプリントをめくり、能力名を確認する。

「そうそう氷結使い。（フリーズハンド）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8687z/>

---

とある科学の氷結使い（フリーズバンド）

2011年12月27日21時50分発行